



# 会津若松市民憲章作文コンクール 最優秀作品

## 小学校2・3年生の部

『やさしさを広げたい』

会津若松市立城南小学校 3年 佐々木 大心

ぼくが「うれしい」と感じる時は、お手伝いをして「ありがとう」と言われた時や、妹ができなくて困っている時に一緒にやってあげると、妹とお母さんに「やさしいね、ありがとう。」と言ってもらえる時です。

こうしたうれしさは、テストで百点を取った時のうれしさとはちょっとちがいます。

テストのうれしさは、思わずガッツポーズが出るようなうれしさだけど、「ありがとう」の言葉はじんわり心があたたかくなるようなうれしさです。

お母さんがいつも、「ありがとう」は人を笑顔にするまほうの言葉だよと言っているのが何となくわかるような気がします。人と人がおたがいの心をあたたため合うことが大切なんだと教えられて、ぼくも何ができるか考えてみました。

初めはちっぽけな事からでもよいのです。例えば、笑顔で元気にあいさつする事や、たのまれた事を気持ちよく引き受けて手伝ったり、何かを貸してと言われたら喜んで貸してあげる事でもよいと思います。あいさつの一言が、色々な人とかわるきっかけになります。ちょっとした親切が相手を笑顔にします。その笑顔がうれしくて、おたがいに心があたたかくなるんだと思います。

ぼくは、二年生の時に左のひじを骨折して、左うでが使えなくて不自由な思いをしました。でもクラスみんながとてもやさしくしてくれて、ぼくが一人で出来ない事を手伝ってくれてすごくうれしい気持ちになった事を今でも覚えています。友達からもらった「うれしさ」を他の人に返してまわりの人にも、ふりまいて、みんなの心があたたかくなったらいいなと思います。

世の中の人、一人ひとりが持っているやさしさが輪のようにどんどん広がっていったら、笑顔あふれる豊かなまちになっていくと思うので、ぼくも小さな事でもいいから、人とかわかって、あいさつを大事にして、人にやさしさをあげられるような人になりたいです。

# 会津若松市民憲章作文コンクール 最優秀作品

## 小学4・5・6年生の部

『自然を守ってくれる人』

会津若松市立城北小学校 4年 東村 康平

「きれいだなあ」

市のひとたちや、駅に行く人、駅から帰る人、観光に来た人たちがそう思えるのは、城北環境美化さんのおかげだとぼくは思います。

ぼくは、駅の近くの広場にある花のかんりをしてくださっている、城北環境美化という団体に着目してみました。毎日、駅前広場の前は、車がよく通ります。ぼくも、ぼくの家も、何回か通ったことがあります。そんなとき、城北環境美化さんの、よく手入れされた花を見ると、心がなごみます。また、駅の前にあるので、朝、仕事に行く人や、夜、仕事から帰ってきた人、中学生、高校生で駅を使って通学する人、子供からお年よりまで心がなごみます。仕事帰りでつかれがたまっている人でも、きれいな花を見れば、つかれがふきとぶと思います。あくまでぼくの想ぞうですが、きれいな花でつかれやストレスがふきとぶのがすごいと思います。だから、城北環境美化さんには、この活動をやめないでほしいです。きっと、いろいろな人が心を温めると思います。

また、城北環境美化さんは駅前広場の中の植物の手入れもやってくれています。広場の中のアジサイやかきねの役わりをしている植物がきれいなのも、活動をつづけている城北環境美化さんのおかげです。どんな団体なのか、駅前の他にどこでどんな活動をしているのかが気になります。

このように、城北環境美化さんは、駅前広場の草花の手入れをがんばってくれています。

なので、ぼくも、大人になったら城北環境美化さんのようになりたいと思っています。

ぼくは、家で多くの草花を育てていて、おばあちゃんから草花の育て方を教えてもらっていますが、大きめのアジサイや、かきねの植物の育て方は、教えてもらったことがないので、むずかしそうですが、がんばってやろうと思います。ぼくは、別にしょうらいのゆめがあるので、ひまができてきたら協力しようと思います。

ぼくも、大人になったら城北環境美化さんに協力しようと思っているし、子供からお年よりまで、たくさんの人の役に立ちたいと思います。なので、城北環境美化さんには、ずっとつづけてほしいです。

# 会津若松市民憲章作文コンクール 最優秀作品

## 中学生の部

『健康で働き豊かなまちをつくりましょう』  
会津若松市立一箕中学校 1年 峯岸 叶

私が以前住んでいたまちでは、ボランティアで、横断歩道で毎日登校を見守ってくれたり、学校の様々な活動の手伝いをしていてくれる人がいました。

私の小学校には、農業科の活動があり、いつも手伝いに来てくださる地域の方がいました。特に田植えの時などは、わからないことやまちがえていることなどを、優しくていねいに教えてくれました。その中で私が大好きだった人はももおばちゃんです。ももおばちゃんには、幼稚園のころからお世話になっていて、会ったときはいつも笑顔で話かけてくれました。ももおばちゃんは、農業科の他に授業で習字を教えてくれて、冬休みには習字教室を開いて、宿題の手伝いをしてくれました。私はその習字教室に行くのを毎週楽しみにしていました。注意されたことを意識して書くと「上手。」とほめてくれて、とてもうれしかったことを覚えています。

私の小学校の給食は、地元のおじいちゃん・おばあちゃんや学校の児童たちが作った米や野菜を使って作った地産地消の給食で、毎日の給食が楽しみで、どれもとてもおいしかったです。特に地元でとれた新鮮な野菜を使ったカレーが絶品でした。野菜は、地域のおじいちゃんやおばあちゃんが作ってくれている野菜なので輸送コストがかからないこともあり、子供たちのためだからと安く提供してくれていました。それまでは、そんなおいしい給食があたり前だと思っていましたが、引っ越ししてきて、それがあたり前ではなかったことに気がつきました。

また、地域の方と協力してつくったもち米を使って、5・6年生が、毎年一人暮らしのおじいちゃん・おばあちゃんに、赤飯を届ける活動をしていました。届けに行くと、来るのを楽しみにしていたような笑顔でうれしそうに受け取ってくれました。地域の人たちが子供たちのために学校に手伝いに来てくれて、学校にいる子供たちが地域の人に赤飯を届ける。そうやって、まち全体がつながり、良い循環が生まれていることに気づきました。

地域の大人と子供がもっと関わられるような仕組みを学校などを通じて作りあげていくとみんなが楽しく笑顔になり活気づいて、心も体も元気に過ごせるようなまちになると私は思います。